

## 古英語における目的語移動と左周縁部

田 中 智 之

### 1. 導入

Rizzi (1997), Cinque (1999) を皮切りとして、統語地図作成 (syntactic cartography) と呼ばれる研究手法が推進され、節の左周縁部に豊かな機能範疇の階層構造が存在することが明らかにされている。例えば、Rizzi の一連の研究によれば (Rizzi (1997, 2001, 2004))、現代英語やイタリア語の言語事実に基づき、従来 CP と呼ばれてきた領域は、発話力に関する Force、話題に関する Top(ic)、焦点に関する Foc(us)、定形性に関する Fin(iteness) 等の機能範疇に分割され、以下のような階層構造を形成している。( \*はその範疇が繰り返し出現可能であることを示す。ここでは、高い位置を占める wh 句の着地点を提供する Int(errogative)、および副詞前置の着地点を提供する Mod(ifier) は省略する。)

(1) ... Force ... Top\* ... Foc ... Top\* ... Fin ... (cf. Rizzi (1997: 297))

この研究手法においては、CP 領域に関する研究が最も盛んに行われているが、近年では vP 領域についても研究が進んでおり (Jayaseelan (2001), Belletti (2004), Maeda (2012))、その先駆的研究である Jayaseelan (2001) は、目的語と副詞の相対語順等の証拠から vP 領域の左周縁部に Foc や Top が存在すると主張し、現代ゲルマン語における節の中間領域への目的語移動に関する分析を試みている。

このように、統語地図作成に基づくアプローチの下で、現代語に関する多くの共時的研究が発表されているが、それを通時的研究に適用した例は非常に少ない。これまで英語の歴史的発達について、CP 領域の左周縁部に言及した先行研究は幾つかあるが (Gelderen (2004), Nawata (2009), Kemenade (2011))、vP 領域の左周縁部における機能範疇の階層構造を解明しようとする研究はほとんどない。本稿では、英語史における動詞と目的語の語順変化について論じた Tanaka (2014) を出発点として、古英語における目的語の分布についてさらに詳しく検討する。特に、目的語と副詞の相対語順に注目することにより、古英語において vP 領域の左周縁部に Foc と Top を含む機能範疇の階層構造が存在し、それぞれの指定部に特定の種類の目的語が移動すると主張する。また、中英語以降における目的語移動、および vP 領域の左周縁部における機能範疇の消失についても簡潔に議論する。

## 2. 英語史における動詞と目的語の語順変化

本節では、3節以降の目的語移動と左周縁部に関する議論の基盤として、Tanaka (2014) で提示された、英語史における動詞と目的語の語順変化に関するデータ、および古英語における目的語の分布に関する分析を概観する。

### 2.1. データ

英語史における「目的語・動詞」(以下 OV) から「動詞・目的語」(以下 VO) への語順変化については多くの文献があるが、その中でも古英語のコーパス *The York-Toronto-Helsinki Parsed Corpus of Old English Prose* (YCOE) と中英語のコーパス *The Penn-Helsinki Parsed Corpus of Middle English, Second edition* (PPCME2) を用いて、初期古英語から後期中英語に至る目的語の分布を網羅的に調査した Pintzuk and Taylor (2006) の調査結果を採用する。その調査結果に、初期近代英語のコーパス *The Penn-Helsinki Parsed Corpus of Early Modern English* (PPCEME) を用いた独自の調査結果を合わせたものが表 1 に示される。いずれの調査においても、動詞移動の影響をなくすために、助動詞を伴う定形節における本動詞と目的語の語順を対象とし、目的語を many people, something 等の数量目的語 (quantified object)、no money, nobody 等の否定目的語 (negative object)、それ以外の完全名詞句である肯定目的語 (positive object) に分類し、表 1 では当該の定形節全体の生起数における OV 語順の割合を示している。<sup>1</sup>

表 1 助動詞を伴う定形節における OV 語順の割合

	EOE	LOE	M1	M2	M3	M4	E1	E2	E3
肯定目的語	56.7%	50.4%	28.4%	3.1%	1.3%	0.7%	0.9%	0.2%	0.03%
数量目的語	63.5%	56.4%	34.7%	10.6%	6.0%	6.1%	2.3%	0.4%	0%
否定目的語	91.8%	78.3%	41.0%	18.2%	20.3%	22.0%	3.8%	0.6%	0%

表 1 より、OV 語順の割合は、英語史を通じて肯定目的語よりも数量・否定目的語の方が高いことが分かる。また、Pintzuk (1999) に従い 1% の頻度が文法性の分岐点であると仮定すると、肯定目的語の OV 語順は M4 (15世紀前半) までに消失したことになるが、これは OV 語順が 15世紀以降、数量・否定目的語に限られるようになったとする、Wurff (1999), Moerenhout and Wurff (2005) の観察と合致する。一方、数量・否定目的語の OV 語順は E1 まで生産的であったが、16世紀後半には消失したことが分かる。

### 2.2. 古英語における OV/VO 語順の派生

古英語における目的語の分布については、二重基底部仮説 (Double Base Hypothesis) に基

づく Pintzuk and Taylor (2006) を踏襲しつつも、Fox and Pesetsky (2005) における循環的線形化のシステムを採用することにより、彼女らが検討していない派生の可能性も含めて、包括的かつ原理的な説明を目指している。

Fox and Pesetsky (2005) は、統語部門から音韻部門への写像においてフェイズを単位として線形化が起こるとし、線形化の情報は派生を通じて消されることはないと仮定している。したがって、フェイズごとの派生において線形化の情報が蓄積され、それらの情報に語順の矛盾がない場合にのみ派生は適格となる。このシステムでは、フェイズを越える移動は、そこで確立された線形化の情報が次のフェイズにおいて矛盾を生じない限り、必ずしもエッジを経由する必要がないという点で、Chomsky (2000) 等とは異なる立場を採用している。

### 2.2.1. 肯定目的語

以上の仮定に基づき、古英語における肯定目的語を伴う OV/VO 語順の派生について考察する。古英語が OV と VO 両方の基底語順を持つとする二重基底部仮説を採用し、肯定目的語の左方移動と右方移動の可能性を考慮すると、可能な語順パターンは以下のようになる。(2a-c) は OV 基底語順、(2d-f) は VO 基底語順に基づく派生である。ここでは、現代スカンジナビア語の目的語転移 (Object Shift) に関する Fox and Pesetsky (2005) の分析に従って、肯定目的語の移動はフェイズのエッジを経由しない A 移動であると仮定する。

- |  |  |
|--|--|
| (2) a. SUBJ AUX [ <sub>vP</sub> OBJ V]                         | d. SUBJ AUX [ <sub>vP</sub> V OBJ]                               |
| b. SUBJ AUX OBJ <sub>i</sub> [ <sub>vP</sub> t <sub>i</sub> V] | e. *SUBJ AUX OBJ <sub>i</sub> [ <sub>vP</sub> V t <sub>i</sub> ] |
| c. SUBJ AUX [ <sub>vP</sub> t <sub>i</sub> V OBJ] <sub>j</sub> | f. SUBJ AUX [ <sub>vP</sub> V t <sub>i</sub> OBJ] <sub>j</sub>   |

上記の派生のうち、目的語移動が適用されていない (2a, d) の派生は適格である。また、(2c, f) における目的語の右方移動が、vP フェイズ内で適用される重名詞句転移 (Heavy NP Shift) と同じタイプの移動であると仮定すると、この移動により語順の矛盾を生じることはなく、これらの派生は適格となる。<sup>2</sup>

残る 2 つの派生のうち、(2b) では OV 基底語順において目的語の左方移動が適用されているが、フェイズごとの線形化の情報は以下ようになる。

- |                    |  |
|--------------------|--|
| (3) a. vP: OBJ < V | b. CP: SUBJ < AUX < OBJ < vP (=V) (= (2b)) |
|--------------------|--|

(3) では vP フェイズにおいて目的語が動詞に先行するが、この語順が目的語の左方移動後の CP フェイズにおいて保持されているので、この派生は適格である。この派生の存在は、肯定目的語が動詞だけでなく副詞にも先行する (4) のような例により支持される。

- (4) Læcedemonie hæfdon Perse oft oferwunnenn  
 Lacedaemonians had Persians often overcome  
 'the Lacedaemonians had often overcome the Persians'

(Or 53. 10-11 / Pintzuk (2002: 293))

次に、(2e) では VO 基底語順において目的語の左方移動が適用されているが、フェイズごと

の線形化の情報は以下のようになる。

- (5) a. vP: V < OBJ    b. CP: SUBJ < AUX < OBJ < vP (=V) (=\*(2e))

(5) では vP フェイズにおいて動詞が目的語に先行するが、この語順が目的語の左方移動後の CP フェイズにおいて逆転し語順の矛盾を生じるので、この派生は不適格となる。Pintzuk and Taylor (2006) によれば、この派生が不可能であることは、肯定目的語が動詞に先行し、動詞が代名詞や不変化詞に先行する、(6) のような構造形が存在しないことから支持される。代名詞や不変化詞のような軽い要素には右方移動が適用されないので、それらが動詞に後続する場合は必ず VO 基底語順となる。したがって、(6) のような構造形が存在しないことは、VO 基底語順において肯定目的語の左方移動が不可能であることの経験的証拠となる。

- (6) \*SUBJ AUX OBJ<sub>i</sub> V pronoun/particle t<sub>i</sub>  
↑  
└──────────────────┘

### 2.2.2. 数量目的語

以下では、肯定目的語との違いに焦点を当てるため、表 1 における否定目的語とそれ以外の数量目的語を区別せず、両者をまとめて数量目的語として議論を進める。

肯定目的語の場合と同様に、二重基底部仮説の下で、数量目的語の左方移動と右方移動の可能性を考慮すると、可能な語順パターンは以下のようになる。(7a-c) は OV 基底語順、(7d-f) は VO 基底語順に基づく派生である。

- (7) a. SUBJ AUX [<sub>vP</sub> OBJ V]    d. SUBJ AUX [<sub>vP</sub> V OBJ]  
       b. SUBJ AUX OBJ<sub>i</sub> [<sub>vP</sub> t<sub>i</sub> V]                                        e. SUBJ AUX OBJ<sub>i</sub> [<sub>vP</sub> V t<sub>i</sub>]  
       c. SUBJ AUX [<sub>vP</sub> t<sub>i</sub> V OBJ]<sub>i</sub>                                        f. SUBJ AUX [<sub>vP</sub> V t<sub>i</sub> OBJ]<sub>i</sub>

上記の派生のうち、目的語移動が適用されていない (7a, d)、および vP フェイズ内で目的語が右方移動している (7c, f) の派生は適格である。

残る 2 つの派生のうち、(7b) では OV 基底語順において目的語の左方移動が適用されているが、(3) の肯定目的語の場合と同様に、2 つのフェイズにおいて目的語と動詞の語順が保持されているので、この派生は適格である。この派生の存在は、数量目的語が動詞だけでなく副詞にも先行する (8) のような例により支持される。注目すべきは、この例が二重目的語構文であり、間接目的語として数量目的語、直接目的語として肯定目的語を含み、肯定目的語が動詞の前に現れている点である。(6) で見たように、肯定目的語は VO 基底語順において動詞を越えて左方移動することができないため、この例は OV 基底語順を持つことになり、したがって、OV 基底語順において数量目的語の左方移動が可能であることを示している。

- (8) we sceolon eallum Godes folce samod þa boclican lare secgan  
 we should all God's people together the written doctrine declare  
 'we should declare the written doctrine to all God's people together'

(cocathom2,ÆCHom\_II\_6:57.153.1150)



(11a) は助動詞が目的語と副詞に先行する形であり、主節と従属節の両方で観察される。古英語の主節は動詞第二現象を示すため、第一要素が主語以外の場合には助動詞が主語に先行する。これに対して、従属節では一般に主語が助動詞に先行する。このような主節と従属節における語順の違いは、通常定形助動詞の移動先の違いに還元され、主節では CP 領域に移動するのに対して、従属節では TP 領域に移動すると仮定されている (Haerberli (2005), Kemenade (2011))。一方、(11b) は助動詞が目的語と副詞に後続する形であり、主に従属節で観察される。Pintzuk (1999) 等によれば、このタイプの語順は、定形助動詞が主要部後続型の T に移動していることと分析される。ここで重要なのは、いずれの構造形においても目的語が vP または VP 領域に生じているという点であり、(11a) では目的語が助動詞または主語に後続していること、(11b) では目的語が主語に後続していることにより確認することができる。(11a, b) において、例えば等位構造である等の理由により、顕在的主語を欠く例が少数あり、そのような例も調査対象に含めることとしたが、次節で見ると、その取り扱いには注意が必要である。<sup>4</sup>

そして、(11a, b) の構造形に合致する例について、肯定目的語と数量目的語に分類し、副詞との相対語順を調査した。その際、目的語の分布と副詞の種類相互関係を調べるために、副詞を談話副詞 (discourse adverb)、時間副詞、その他の 3 つに分類した。Kemenade and Los (2006) によれば、談話副詞は þa, þonne 'then', nu 'now', eac 'also' からなるが、主に元々時間副詞であったものが談話機能を果たす副詞へと文法化されたものである。ここでの調査対象の構造形である節の中間領域に現れるこれらの副詞が、談話副詞、時間副詞のどちらであるのかを判別するのは困難であるが、以下では別種類の副詞として扱うこととする。また、その他のカテゴリーには、様態、程度、場所、方向等を表す、主に vP/VP 副詞が含まれる。

### 3.2. 目的語と副詞の相対語順に関するデータ

前節で概観した調査方法に基づいて、YCOE から得られた目的語と副詞の相対語順に関するデータを見てゆく。O1 と O4 はデータベースが小さく、該当する例が全体として 1 例しか見つからなかったため、ここでは O2 と O3 の数値のみを示す。以下、肯定目的語、数量目的語の順に、(11a, b) それぞれの構造形における「副詞・目的語」と「目的語・副詞」語順の分布を提示する。

#### 3.2.1. 肯定目的語

まず、(11a) の構造形における肯定目的語の分布に関する調査結果は、表 2 にまとめられる。各欄の数値は実例数、括弧内の数値はそれぞれの項目 (談話副詞、時間副詞、その他、総計) における「目的語・副詞」語順の割合を示す。表 2 より、談話副詞と時間副詞については頻度が低いものの、肯定目的語は (11a) の構造形において全ての種類の副詞に先行可能であることが分かる。

また、(11b) の構造形における肯定目的語の分布に関する調査結果は、表 3 にまとめられる。

表2 肯定目的語と副詞の相対語順：(11a)

		O2	O3
談話副詞	副詞・目的語	38	29
	目的語・副詞	3 (7.3%)	3 (9.4%)
時間副詞	副詞・目的語	35	31
	目的語・副詞	7 (16.7%)	12 (27.9%)
その他	副詞・目的語	73	69
	目的語・副詞	56 (43.4%)	53 (43.4%)
総計	副詞・目的語	146	129
	目的語・副詞	66 (31.1%)	68 (34.5%)

表3 肯定目的語と副詞の相対語順：(11b)

		O2	O3
談話副詞	副詞・目的語	69	5
	目的語・副詞	3 (4.2%)	2 (28.6%)
時間副詞	副詞・目的語	9	6
	目的語・副詞	7 (43.8%)	6 (50%)
その他	副詞・目的語	19	9
	目的語・副詞	35 (64.8%)	15 (62.5%)
計	副詞・目的語	97	20
	目的語・副詞	45 (31.7%)	23 (53.5%)

この場合も同様の観察が当てはまるが、表2と比べると「目的語・副詞」語順の割合が高いようである。この事実は、VPだけでなくTPにおける主要部と補部の位置関係が目的語移動に影響する可能性を示唆していると思われるが、今後の検討課題とする。

### 3.2.2. 数量目的語

次に、(11a)の構造形における数量目的語の分布に関する調査結果は、表4にまとめられる。肯定目的語との顕著な違いは、数量目的語が談話副詞や時間副詞に先行する例がほとんど見られないという点である。以下では、網掛けで示した「目的語・副詞」語順の例について検討し、ここでの議論から除外すべきであると論じる。

まず、数量目的語が談話副詞に先行しているO2の1例は以下に示されるが、それは主格主語を欠く非人称構文であり、数量目的語が与格経験者として現れている。Allen (1995)によれば、非人称構文における与格経験者は主語位置を占めるので、(12)における数量目的語はTP指定部に移動していることになる。したがって、この例はvP領域の左周縁部における目的語のデータから除外すべきであろう。

表4 数量目的語と副詞の相対語順：(11a)

		O2	O3
談話副詞	副詞・目的語	10	9
	目的語・副詞	1 (9.1%)	0 (0%)
時間副詞	副詞・目的語	10	8
	目的語・副詞	1 (9.1%)	0 (0%)
その他	副詞・目的語	9	8
	目的語・副詞	13 (59.1%)	8 (50%)
計	副詞・目的語	29	25
	目的語・副詞	15 (34.1%)	8 (24.2%)

- (12) Ac hwy sceal ænigum menn ðonne ðyncean to orgellic ðæt he  
 but why shall any man then seem too ignominious that he  
 onbuge to oðres monnes willan,  
 yield to other man's will  
 'but why, then, shall any man think it too ignominious to yield to other man's will'  
 (cocura,CP:42.307.14.2060)

次に、数量目的語が時間副詞に先行している O2 の 1 例は (13) である。

- (13) Sua ðu meahht ælcne unðeaw on ðæm menn *æresð* be sumum tacnum  
 so you can any vice on the man first by some signs  
 ongietan, hwæs ðu wenan scealt, ær he hit mid wordum oððe  
 infer what you expect shall before he it with words or  
 mid weorcum cyðe.  
 with deeds reveal  
 'so you can infer some vice in a man first from certain signs, what you shall expect,  
 before he reveals it with words or deeds'  
 (cocura,CP:21.157.19.1076)

この例では、斜体の時間副詞が主節動詞ではなく、後続する PP (be sumum tacnum) の修飾語として、PP の一部を構成している可能性がある。すなわち、If the American people ever allow private banks to control the issue of their currency, [first by inflation], [then by deflation], ... のような例における、現代英語の時間副詞と同じ用法であると考えられる。これが正しいとすると、(13) では数量目的語が vP/VP を修飾する (それぞれ場所と手段を表す) 2 つの PP を越えて移動していることになる。

以上の議論が正しいければ、表4において網掛けで示した2例は、ここでの調査対象に含めるべきではない。したがって、用例の総数は少ないものの、数量目的語は vP/VP 副詞には先行するが、談話副詞と時間副詞には先行することができないという点において、前節で見た肯定



目的語と対照的な分布を示すと結論付けられる。

この結論を念頭に置いて議論を進めると、(11b)の構造形における数量目的語の分布は表5のようになる。

表5 数量目的語と副詞の相対語順：(11b)

		O2	O3
談話副詞	副詞・目的語	4	3
	目的語・副詞	0 (0%)	0 (0%)
時間副詞	副詞・目的語	3	2
	目的語・副詞	1 (25%)	0 (0%)
その他	副詞・目的語	12	2
	目的語・副詞	7 (36.8%)	10 (83.3%)
計	副詞・目的語	19	7
	目的語・副詞	8 (29.6%)	10 (58.8%)

数量目的語が時間副詞に先行している O2 の 1 例は以下に示されるが、そこでは等位接続された主節において主格主語が省略されており、数量目的語が and の直後に現れている。したがって、(14) では数量目的語が CP 領域に焦点化されている可能性があり、vP 領域の左周縁部における目的語のデータに含めるべきではないと思われる。<sup>5</sup> この 1 例を除外すれば、用例の総数は少ないものの、(11b) の構造形においても数量目的語は談話副詞と時間副詞に常に後続することになり、表 4 の調査結果から得られた上記の結論と一致する。<sup>6</sup>

- (14) Ond nænigum ricum men æfre ænig feoh sellan wolde,  
 and no rich man ever any money give will  
 'and will give no rich man any money' (cobede,Bede\_3:3.162.14.1560)

### 3.3. 左周縁部における機能範疇の階層構造と目的語移動

以上の調査結果より、肯定目的語は全ての種類の副詞に先行することができるが、数量目的語は vP/VP 副詞のみに先行し、談話副詞と時間副詞には先行することができないことが分かった。本節では、古英語における vP 領域の左周縁部に、CP 領域に仮定されているような機能範疇の階層構造が存在すると主張し、TopP および FocP 指定部への目的語移動の観点から、この調査結果に関する説明を試みる。

vP 領域の左周縁部に機能範疇の階層構造を設定するいくつかの研究のうち、現代ゲルマン語における節の中間領域への目的語移動に関する Jayaseelan (2001) の分析を出発点とする。現代ドイツ語の (15) の例において、目的語 Maria は副詞 gestern を越えて左方移動しており、この移動はかき混ぜ (scrambling) と呼ばれる。Jayaseelan によれば、かき混ぜは vP 領域における TopP 指定部への移動であり、その構造は (16) に示される。

- (15) dass Jens Maria *gestern* geküsst hat  
 that John Mary yesterday kissed has  
 ‘that John kissed Mary yesterday’ (Thráinsson (2001: 155))

- (16) ... [<sub>TopP</sub> OBJ [<sub>Top</sub> Top [<sub>AdvP/NegP</sub> Adv/Neg ... .. [<sub>FocP</sub> Foc [<sub>vP</sub> ... ]]]]]
- 

Jayaseelan は現代ドイツ語が VO 基底語順を持つと仮定し、OV 表層語順を派生するために、目的語は Adv/Neg と Foc の間の位置に移動するが、話題として機能する特定の解釈を持つ目的語は副詞や否定辞を越えて、さらに TopP 指定部に移動すると主張している。一方、焦点として機能する非特定の解釈を持つ目的語は、FocP 指定部に移動するとしている。

ここでは、Jayaseelan (2001) の分析を古英語の目的語移動に拡張するが、その際いくつかの修正が必要である。第一に、本稿は古英語が OV と VO 両方の基底語順を持つとする二重基底部仮説を採用しているので、OV 表層語順を派生するために仮定されている、(16)における最初の移動は不要である。2節の議論に従って、肯定目的語は OV 基底語順においてエッジを経由せず vP の外部に移動し、数量目的語は OV/VO 基底語順においてエッジを経由して vP の外部に移動すると仮定する。第二に、(16)では副詞と否定辞を統一的に扱っているが、3節で見たように、副詞の種類によって目的語との相対語順に関して異なる分布を示すため、少なくとも vP/VP 副詞と談話・時間副詞の構造的な位置を区別しなければならない。第三に、Jayaseelan は vP 領域において Foc の上に Top があり、Top は繰り返し出現可能であると仮定している。一方、(1)で見た Rizzi (1997)による元々の提案では、Top が Foc の上位と下位のどちらにも現れ、繰り返し出現可能であるとされている。以下では、Rizzi の提案する構造を採用し、その中に2つの副詞の位置を設定することにより、古英語における目的語と副詞の相対語順が正しく説明されると主張する。

以上の議論を踏まえ、(17)に示される、古英語の vP 領域における機能範疇の階層構造、および目的語移動の着地点を提案する。ここでは便宜上、主要部先頭型の TP を用いるが、主要部後続型の TP においても、機能範疇の階層構造や目的語移動の着地点は同じである。P-OBJ は肯定目的語、Q-OBJ は数量目的語を表し、Adv1 は談話・時間副詞、Adv2 は vP/VP 副詞を表す。副詞が(16)のように主要部として句を投射するのか、後続する範疇に付加されているのかについては、ここでは詳しく論じない。

- (17) [<sub>TP</sub> SUBJ [<sub>T</sub> AUX [<sub>TopP</sub> P-OBJ [<sub>Top</sub> Top Adv1 [<sub>FocP</sub> Q-OBJ [<sub>Foc</sub> Foc [<sub>TopP</sub> P-OBJ [<sub>Top</sub> Top Adv2 [<sub>vP</sub> v VP]]]]]]]]]]

(17)では、Rizzi (1997)が CP 領域の左周縁部に設定した機能範疇のうち、Top と Foc が TP と vP の間に存在し、Foc を挟んで Top がその上位と下位に現れている。一方、Force と Fin は節全体に関わる機能範疇であるので、それらが vP 領域に存在しないとするのは妥当であろう。

(17)の構造に基づき、目的語移動の着地点について考察する。まず、数量目的語は不定表現であり、通常は話題になりえないので、FocP 指定部に移動し、焦点として機能すると考えられる。その位置は Adv1 と Adv2 の間にあるので、数量目的語は vP/VP 副詞に先行するが、談話・時間副詞に先行することができないという事実が説明される。<sup>7</sup>次に、肯定目的語は FocP を挟んで 2 箇所が存在する TopP 指定部に移動する。上位の TopP 指定部に移動した場合には談話・時間副詞に先行する語順となり、下位の TopP 指定部に移動した場合には vP/VP 副詞に先行する語順となる。<sup>8</sup>

ここで、古英語において肯定目的語が TopP 指定部に移動することを裏付けるために、肯定目的語の定性に着目する。古英語の語順に関する先行研究の中でも、Kemenade and Los (2006), Yanagi (2008) は、副詞に先行する目的語が定性を持つ傾向が強いことを指摘している。そして、Yanagi は本動詞のみからなる定形節を調査し、目的語が定性・特定性に関する機能範疇の指定部に移動することを提案している。ここでは、助動詞を伴う定形節の調査から得られた表 2、3 における肯定目的語のデータを、その定性の観点から整理し直すこととしたが、その結果は表 6、7 に示される。各欄のスラッシュの左側の数字が定名詞句、右側の数字が不定名詞句の実例数であり、括弧内は定名詞句の割合を示す。表 7 における O3 のデータを除けば（これについては別途説明が必要）、肯定目的語が副詞に先行する場合には、後続する場合と比較して定名詞句の割合が全体的に高いことが分かる。したがって、副詞に先行する肯定目的語は定性を持つ話題として機能しており、その移動は vP 領域における話題化、すなわち TopP 指定部への移動であると結論付けられる。

最後に、肯定目的語の着地点として、2 箇所の TopP 指定部を設定することを支持する証拠を提示する。これまで見てきた例は全て副詞を 1 つのみ含む例であったので、上位の TopP 指定部のみで十分ではないかという反論が出るかもしれない。ここで Adv1 と Adv2 の両方に副詞が現れている例を検証してみると、以下に示されるように、肯定目的語が 2 つの副詞に先行している例、および肯定目的語が 2 つの副詞の間に現れている例のどちらも観察される。したがって、肯定目的語は Adv1 に先行する上位の TopP 指定部に加えて、Adv1 と Adv2 の間にある下位の TopP 指定部に移動することができることになり、(17) の提案は経験的に証拠付けられると言える。<sup>9</sup>

- (18) a. he wolde þæt rice      sona her on eorþan gesettan  
 he would that kingdom soon here on earth build  
 'he would soon build that kingdom here on earth'  
(coblick,HomS\_46\_[BIHom\_11]:117.24.1491)
- b. we willað nu ure spræce her geendian;  
 we will now our speech here end  
 'we will now end our speech here'      (cocathom2,+ACHom\_II\_41:308.138.7003)

表6 肯定目的語の定性と副詞との相対語順:(11a)

		O2	O3
談話副詞	副詞・目的語	26 / 12 (68.4%)	24 / 5 (82.8%)
	目的語・副詞	2 / 1 (66.7%)	1 / 2 (33.3%)
時間副詞	副詞・目的語	25 / 9 (73.5%)	15 / 17 (46.9%)
	目的語・副詞	6 / 1 (85.7%)	12 / 0 (100%)
その他	副詞・目的語	48 / 26 (64.9%)	44 / 25 (63.8%)
	目的語・副詞	48 / 8 (85.7%)	42 / 11 (79.2%)
計	副詞・目的語	99 / 47 (67.8%)	83 / 47 (63.8%)
	目的語・副詞	56 / 10 (84.8%)	55 / 13 (80.9%)

表7 肯定目的語の定性と副詞との相対語順:(11b)

		O2	O3
談話副詞	副詞・目的語	72 / 4 (94.7%)	5 / 0 (100%)
	目的語・副詞	3 / 0 (100%)	2 / 1 (66.7%)
時間副詞	副詞・目的語	7 / 3 (70%)	5 / 1 (83.3%)
	目的語・副詞	7 / 1 (87.5%)	2 / 4 (33.3%)
その他	副詞・目的語	8 / 3 (72.7%)	9 / 0 (100%)
	目的語・副詞	34 / 1 (97.1%)	12 / 3 (80%)
計	副詞・目的語	87 / 10 (89.7%)	19 / 1 (95%)
	目的語・副詞	44 / 2 (95.7%)	16 / 8 (66.7%)

#### 4. 結語

本稿では、古英語における目的語と副詞の相対語順について調査し、vP領域の左周縁部における機能範疇の階層構造の観点から説明を試みた。まず、肯定目的語はOV基底語順において左方移動が適用されるが、談話・時間副詞の上位にあるTopP指定部、および談話・時間副詞とvP/VP副詞の間にあるTopP指定部に移動することができると主張した。一方、数量目的語はOV/VO基底語順において左方移動が適用されるが、vP/VP副詞の上位にあるFocP指定部に移動することができると主張した。以上の結論が正しければ、CP領域の左周縁部に仮定されている機能範疇の階層構造が、vP領域の左周縁部にも存在することになり、それが古英語に関する研究から支持される限りにおいて、本稿の研究成果は歴史言語学からの統語地図作成のアプローチに対する貢献であると言える。

最後に、この研究成果を踏まえて、中英語以降の目的語移動、およびvP領域の左周縁部の歴史の変遷について簡潔に述べる。Thráinsson (1996)によれば、ある言語において機能範疇が設定されるためには、形態・統語的な肯定証拠により裏付けられる必要がある。具体的に

は、機能範疇により認可されるべき豊かな動詞屈折が存在するか、機能範疇の指定部や主要部が何らかの要素によって占められているならば、言語獲得中の子供は当該の機能範疇を設定することができる。vP 領域の左周縁部における Top と Foc については、それに関連する形態素が動詞上に現れることはなく、またそれが動詞移動の最終着地点になるとは考えにくいので、その設定に必要な肯定証拠は指定部に何らかの要素が存在する構造型である。

まず、肯定目的語の移動に関わる Top の肯定証拠は、それが副詞に先行する語順である。PPCME2 と PPCEME に基づく調査結果の紹介や詳しい議論は別の機会とするが、肯定目的語が副詞に先行する語順は、M1 まである程度の頻度で見られるものの、それ以降はほとんど観察されなくなり、M3 を最後に消失している。2 節で見たように、肯定目的語を伴う OV 語順は M4 までにはほぼ消失しており、言語獲得中の子供は 14 世紀中に OV 基底語順を設定することが不可能になったと考えられる。そして、肯定目的語は OV 基底語順においてのみ左方移動が可能であるので、14 世紀における OV 基底語順の消失により肯定目的語の左方移動も消失し、vP 領域の左周縁部における Top の存在を示す肯定証拠がなくなったと考えられる。

次に、数量目的語の移動に関わる Foc の肯定証拠には、それが副詞に先行する語順が含まれる。その語順も M3 を最後に消失しているが、2 節で見たように、数量目的語を伴う OV 表層語順は E1 まである程度生産的であり、16 世紀後半には消失した。OV 基底語順が消失した 15 世紀以降も OV 表層語順が存続したのは、数量目的語には A バー移動が適用されるため、VO 基底語順からの左方移動が可能であったからであると分析される。したがって、15 世紀から 16 世紀前半に見られる数量目的語を伴う OV 表層語順は Foc の肯定証拠となるが、それが 16 世紀後半に消失したのはなぜであろうか。それには、Foc の肯定証拠となる別の 2 つの構文が関与していると思われる。

1 つ目は Moerenhout and Wurff (2005) が指摘する数量詞の副詞的用法であり、以下の例において副詞的数量詞が現れている位置は、表面上 (8)、(10) で見た数量目的語の位置と平行的である。

- (19) a. his darknesse shall something (=to some extent) cloke myne ignoraunce  
(Toxophilus, 131, 18-19 / Moerenhout and Wurff (2005: 107))
- b. they couldde nothing (= not at all) perceiue what the protectour entended  
(Richard III, 40, 20-1 / ibid.)

彼らによれば、数量詞の副詞的用法は 16 世紀に衰退しており、それが数量目的語の移動の消失に関係があると示唆している。2 つ目は (20) に例示される他動詞虚辞構文 (transitive expletive construction) であり、Ingham (2000), Tanaka (2000) 等によれば、英語史において 14 世紀から 16 世紀ごろまで存在していた構文である。

- (20) a. without these ... Ther may no kyng lede gret lordship  
without these there may no king lead great lordship

(Cast. Love (Hallw.) 306 / Tanaka (2000: 479))

b. there woulde some Iewes reprove this his doing

(Udall, etc. Erasm. Par. / ibid.: 483)

Ingham は、パストン家書簡集に見られる他動詞虚辞構文の主語がほぼ否定表現に限られることを指摘し、さらに OV 表層語順も否定目的語にほぼ限られることから、いずれも NegP 指定部への(主語または目的語の)移動を伴う構造であると主張している。しかし、2節で見たように、15世紀から16世紀前半において否定以外の数量目的語も OV 表層語順に現れており、さらに(20b)に示されるように、他動詞虚辞構文は否定以外の不定主語も取ることができるので、OV 表層語順における数量目的語と他動詞虚辞構文における不定主語が同じ位置を占めるとすれば、その位置は FocP 指定部であると仮定するのが妥当であろう。

以上の議論に基づけば、数量詞の副詞的用法、および他動詞虚辞構文の存在は vP 領域における Foc の肯定証拠となるが、いずれも16世紀中に衰退した。したがって、この時期に言語獲得中の子供は Foc を設定することができなくなり、数量詞目的語の移動が消失したと考えられる。以上の方向性が正しければ、Top は14世紀、Foc は16世紀に消失したことになり、現代英語の vP 領域の左周縁部には機能範疇の階層構造が存在しないことになる。現代英語の幾つかの構文について、vP 領域の左周縁部に Top や Foc を設定する分析が提案されているが(Jayaseelan (2001), Butler (2003), Merchant (2008), Maeda (2012))、機能範疇の階層構造を設定することなく、それらの構文の特性を説明することが今後の課題となる。

## 注

\* 本論文は、科学研究費補助金(基盤研究(C) 課題番号26370561)の研究成果の一部である。

1. YCOE, PPCME2, PCEME の時代区分は、O1 (-850), O2 (850-950), O3 (950-1050), O4 (1050-1150), M1 (1150-1250), M2 (1250-1350), M3 (1350-1420), M4 (1420-1500), E1 (1500-1569), E2 (1570-1639), E3 (1640-1710) である。Pintzuk and Taylor (2006) は、O1 と O2 を合わせて EOE (初期古英語)、O3 と O4 を合わせて LOE (後期古英語) としている。
2. 重名詞句転移の着地点が VP 付加位置であるとする分析については、Rochemont and Culicover (1990) を参照のこと。
3. 数量目的語の移動により前置詞残置が生じている以下の例は、数量目的語が A バー移動の適用を受けることを示唆する。(これに対して、肯定目的語の移動による前置詞残置の例は見られない。) 現代アイスランド語における同様の証拠については、Svenonius (2000) を参照のこと。

(i) he ne may no þing þenke on but onliche on hym  
 he not may no thing think on but only on him (CMVICES4,106.182)

4. 助動詞を伴う定形節において、目的語と副詞が本動詞に先行する(11a, b)以外の構造形として以下のものがある。

(i) ... (SUBJ) {OBJ ADV / ADV OBJ} AUX V ...

この形は主に従属節で観察されるが、Pintzuk (1999) 等によれば、このタイプの語順は動詞繰り上げ(verb raising)によって派生され、本動詞が主要部後続型の T に移動している定形助動詞の右側に付加されると

分析される。しかし、Roberts (1997) 等において、動詞繰り上げという操作に問題があることが指摘されているので、その分析を支持することはできない。代案として、主要部先頭型のTに移動している定形助動詞を越えて、目的語が左方移動するという分析が考えられる。これが正しいとすると、目的語はTP領域に移動していることになるので、vP領域の左周縁部に生じる目的語の例ではないことになる。(i)の構造形における目的語の位置、および以下で提案される目的語移動との関連性については今後の課題とする。

5. 15世紀から16世紀において等位節で観察されるOV語順に関する同様の分析については、Wurff (1999), Moerenhout and Wurff (2005)を参照のこと。
6. Kemenade (2011)は分布上の類似性から、古英語における否定副詞naが談話副詞[pa, þonneと同じ構造的な位置を占めておりと主張している。3.2節の調査ではnaをその他のカテゴリーに分類しているが、彼女の主張が正しいければ、naとの相対語順においても肯定目的語と数量目的語が異なる振る舞いを示すことが予測される。用例の総数は少ないものの、(11a, b)の構造形を合わせると、肯定目的語がnaに先行する語順は3例(後続する語順は16例)であるのに対し、数量目的語がnaに先行する語順は1例(後続する語順は4例)となっている。後者の1例においては、否定副詞の綴りがnaではなくneとなっているので、古英語において広く見られる動詞の接語としての文否定辞と考えられるかもしれない。この1例を除外すれば、肯定目的語のみが否定副詞に先行することができるという、談話副詞や時間副詞と同様の観察が当てはまることになる。
7. Wurff (1999)は、15世紀に見られる数量目的語を伴うOV語順が、数量目的語のVP指定部への移動により派生され、その移動は顕在的な数量詞繰り上げ(quantifier raising)であると分析している。この分析に従えば、数量目的語がvPフェイズのエッジに留まる可能性も考えられるかもしれない。
8. 現代ゲルマン語において、特定の解釈を持つ不定目的語にはかき混ぜが適用可能であり、Jayaseelan (2001)はそれをTopP指定部への移動として分析している。同様の分析が、数量目的語が談話・時間副詞に先行している(12)–(14)についても当てはまるかもしれないが、これらの例における数量目的語の特定性を判断するのは困難であるため、可能性を示唆するに留めておく。
9. 現代ドイツ語のかき混ぜも同様の分布を示し、2つの副詞を含む文において、(ia, b)いずれの語順も可能である。この類似性は、(17)の構造に基づく、古英語の肯定目的語の移動と現代ドイツ語のかき混ぜの統一的分析の可能性を示唆するが、それについては今後の課題とする。

- (i) a. dass er das Buch ohne Zweifel nicht gelesen hat  
 that he the book without doubt not read has  
 b. dass er ohne Zweifel das Buch nicht gelesen hat  
 that he without doubt the book not read has  
 'that he has undoubtedly not read the book'

(Thráinsson (2001: 163))

## 参考文献

- Allen, C. (1995) *Case Marking and Reanalysis: Grammatical Relations from Old to Early Modern English*, Clarendon Press, Oxford.
- Belletti, A. (2004) "Aspects of the Low IP Area," In L. Rizzi (ed.) *The Structure of IP and CP: The Cartography of Syntactic Structures*, Vol. 2, Oxford University Press, Oxford, 16–51.
- Butler, J. (2003) "A Minimalist Treatment of Modality," *Lingua* 113, 967–996.
- Chomsky, Noam (2000) "Minimalist Inquiries: The Framework," In R. Martin, D. Michaels, and J. Uriagereka (eds.) *Step by Step: Essays on Minimalist Syntax in Honor of Howard Lasnik*, MIT Press, Cambridge, MA., 89–155.
- Cinque, G. (1999) *Adverbs and Functional Heads: A Cross-Linguistic Perspective*, Oxford University Press, Oxford.

- Fox, D. and D. Pesetsky (2005) "Cyclic Linearization of Syntactic Structure," *Theoretical Linguistics* 31, 1-45.
- Gelderen, E. van (2004) *Grammaticalization as Economy*, John Benjamins, Amsterdam.
- Haeberli, E. (2005) "Clause Type Asymmetries in Old English and the Syntax of Verb Movement," In M. Batllori and M. Roca (eds.) *Grammaticalization and Parametric Variation*, Oxford University Press, Oxford, 267-283.
- Ingham, R. (2000) "Negation and OV Order in Late Middle English," *Journal of Linguistics* 36, 13-38.
- Jayaseelan, K. (2000) "IP-internal Topic and Focus Phrases," *Studia Linguistica* 55, 39-75.
- Kemenade, A. van (1987) *Syntactic Case and Morphological Case in the History of English*, Foris, Dordrecht.
- Kemenade, A. van (2011) "Secondary Negation and Information Structure Organization in the History of English," In P. Larrivière and R. Ingham (eds.) *The Evolution of Negation: Beyond the Jespersen Cycle*, Mouton de Gruyter, Berlin, 77-113.
- Kemenade, A. van and B. Los (2006) "Discourse Adverbs and Clausal Syntax in Old and Middle English," In A. van Kemenade and B. Los (eds.), *The Handbook of the History of English*, Blackwell, Oxford, 224-248.
- Maeda, M. (2012) "The Fine Structure of the vP Periphery and Heavy NP Shift/Locative Inversion," *JELS* 29, 267-273.
- Merchant, J. (2008) "An Asymmetry in Voice Mismatches in VP-ellipsis and Pseudogapping," *Linguistic Inquiry* 39, 169-179.
- Moerenhout, M. and W. van der Wurff (2005) "Object-Verb Order in Early Sixteenth-Century Prose," *English Language and Linguistics* 9, 83-114.
- Nawata, H. (2009) "Clausal Structure and Inflectional Paradigm: The Case of V2 in the History of English," *English Linguistics* 26, 247-283.
- Pintzuk, S. (1999) *Phrase Structures in Competition: Variation and Change in Old English Word Order*, Garland, New York.
- Pintzuk, S. (2002) "Verb-Object Order in Old English: Variation as Grammatical Competition," In D. Lightfoot (ed.) *Syntactic Effects of Morphological Change*, Oxford University Press, Oxford, 276-299.
- Pintzuk, S. and A. Taylor (2006) "The Loss of OV Order in the History of English," In A. van Kemenade and B. Los (eds.) *The Handbook of the History of English*, Blackwell, Oxford, 249-278.
- Rizzi, L. (1997) "The Fine Structure of the Left Periphery," In L. Haegeman (ed.) *Elements of Grammar*, Kluwer, Dordrecht, 281-337.
- Rizzi, L. (2001) "On the Position of Int(errogative) in the Left Periphery of the Clause," In G. Cinque and G. Salvi (eds.) *Current Studies in Italian Syntax: Essays Offered to Lorenzo Renzi*, Elsevier, Amsterdam, 287-296.
- Rizzi, L. (2004) "Locality and Left Periphery," In A. Belletti (ed.) *Structures and Beyond: The Cartography of Syntactic Structures*, Vol. 3, Oxford University Press, Oxford, 223-251.
- Roberts, I. (1997) "Directionality and Word Order Change in the History of English," In A. van Kemenade and N. Vincent (eds.) *Parameters of Morphosyntactic Change*, Oxford University Press, Oxford, 397-426.
- Rochement, M. and P. Culicover (1990) *English Focus Constructions and the Theory of Grammar*, Cambridge University Press, Cambridge.
- Svenonius, P. (2000) "Quantifier Movement in Icelandic," In P. Svenonius (ed.) *The Derivation of VO and OV*, John Benjamins, Amsterdam, 255-292.
- Tanaka, T. (2000) "On the Development of Transitive Expletive Constructions in the History of English," *Lingua* 110, 473-495.
- Tanaka, T. (2014) "The Distribution of Verb-Object Order in the History of English: A Cyclic Linearization Approach," In K. Nakagawa (ed.) *Studies in Modern English: The Thirtieth Anniversary Publication of the Modern English Association*, Eihosha, Tokyo, 251-266.
- Thráinsson, H. (1996) "On the (Non-)Universality of Functional Categories," In W. Abraham, S. Epstein, H. Thráinsson, and J.-W. Zwart (eds.) *Minimal Ideas: Syntactic Studies in the Minimalist Framework*, John



- Benjamins, Amsterdam, 253–281.
- Thráinsson, H. (2001) “Object Shift and Scrambling,” In M. Baltin and C. Collins (eds.) *The Handbook of Contemporary Syntactic Theory*, Blackwell, Oxford, 148–202.
- Wurff, W. van der (1997) “Deriving Object-Verb Order in Late Middle English,” *Journal of Linguistics* 33, 485–509.
- Wurff, W. van der (1999) “Objects and Verbs in Modern Icelandic and Fifteenth Century English: A Word Order Parallel and Its Causes,” *Lingua* 109, 237–265.
- Yanagi, T. (2008) “Object Movement in Old English Subordinate Clauses,” In M. Amano, M. Ogura, and M. Ohkado (eds.), *Historical Englishes in Varieties of Texts and Contexts*, Peter Lang, Frankfurt am Main, 169–183.

### コーパス

- Kroch, A., B. Santorini, and L. Delfs (2004) *The Penn-Helsinki Parsed Corpus of Early Modern English*, University of Pennsylvania, Philadelphia.
- Kroch, A. and A. Taylor (2000) *The Penn-Helsinki Parsed Corpus of Middle English*, Second Edition, University of Pennsylvania, Philadelphia.
- Taylor, A., A. Warner, S. Pintzuk, and F. Beths (2003) *The York-Toronto-Helsinki Parsed Corpus of Old English Prose*, University of York, York.

キーワード：機能範疇、左周縁部、目的語移動、肯定目的語、数量目的語

**Abstract**

## Object Movement and Left Periphery in Old English

Tomoyuki Tanaka

Taking the analysis by Tanaka (2014) as a point of departure, this paper investigates the relative order between objects and adverbs in Old English (OE) finite clauses, and attempts to account for the results of the investigation in terms of object movement and the hierarchical structure of functional categories in the left periphery of the vP domain. Assuming the distinction between positive objects and quantified objects, it is shown by the investigation based on an OE corpus that quantified objects can appear before vP/VP adverbs, but not before discourse/temporal adverbs, while positive objects can precede both types of adverbs. Then, it is argued that quantified objects and positive objects move to [Spec, Foc(us)P] and [Spec, Top(ic)P], respectively, in the left periphery of the vP domain where Foc is sandwiched between two instances of Top. Finally, this paper touches upon the loss of the hierarchical structure of functional categories in the left periphery of the vP domain after Middle English, suggesting a separate cause for Top and Foc.

Keywords: functional category, left periphery, object movement, positive object, quantified object